



日経ビジネスに見る「経済先読み・解説」 159号

経営コンサルタント 栗田 剛志 12.09.24

発行元：m9コンサルティング

<http://www.m9consulting.biz>

このメールマガジンは、今週発売となる日経ビジネスの中から気になった記事を選び、私なりの視点で考えたことについてお伝えするものです。会社での朝礼時のネタ、取引先との会話、同僚との間の話題づくりにお役に立てたらと思い、毎週月曜日に発信いたします。

「日経ビジネス2012年9月24日号 no.1659
『1000年の秘湯を守り抜く～日本秘湯を守る会』」より

【文化とは】

「日本秘湯を守る会」をご存じでしょうか。

「温泉文化の担い手として、宿を大きく便利にするのではなく、今のままで旅人を呼びましょう」との掛け声のもと、全国に散らばる秘湯の宿が団結し、新しい旅の流れを作ろうという組織です。発足は1975年。ずいぶん昔のことです。

物質的に恵まれていた当時は、へんぴで古臭いままの自分たちを許せなかったというのが、山奥にある宿の主人の心情です。

団結を求めて山奥の温泉宿を回り始めた当初、「あなたのいう秘湯になりたくないから頑張ってるんだよ」と怒鳴られたこともあったそうです。

発足当初は33軒の宿が集いました。今では、全国で100軒以上の会員宿を組織する会に発展しています。

その日本秘湯を守る会の会長、佐藤好億(さとうよしやす)氏は、こう言います。

「今の日本人は、『失って初めて気づいた』ということが多いように思う」

私たちは進歩を望むばかりに、大事なもので切り捨ててはいないでしょうか。

佐藤氏は、その場しのぎで進路を選ぶことへの警鐘を鳴らしています。

東電の原発事故を受けて、日本のエネルギー政策は大きく変化しています。原発に代わる電力供給源候補として、風力、太陽光、バイオマスなど様々な手法が挙げられる中で、地熱も期待が寄せられる再生可能エネルギーです。

世界有数の火山国である日本は、地熱資源が豊富とされ、原子力を補う新たな電源として期待されています。

それでは、地熱発電開発によって犠牲になるのは誰でしょうか。

「地中の蒸気や熱水である地熱とは、広義の温泉の範疇にはいる。かつて、発電用に大量に地熱を採取した地域周辺では、温泉湧出量の減少などが起きた例が複数ある。その資源は有限だ。また、地中深くの熱水には重金属など有害物質も含まれている。つまり、地熱は再生可能エネルギーともクリーンエネルギーとも言えない」

これは、日本秘湯を守る会が、環境省に対して述べた反対意見の要約です。

太陽光や風力と違い、地熱は採取によって悪影響を受ける対象が存在します。全国に188軒ある日本秘湯を守る会の会員宿の多くは、地熱発電開発の候補地となり得る地域に属します。国立公園内にポツンと一軒だけ宿を構えるところも少なくありません。

源泉かけ流しを売りにする一軒宿にとって、温泉の枯渇や水質汚染は、商売の終わりを意味します。

日本秘湯を守る会の会員宿は、経営的に厳しい状況が続いているのが現実です。また、宿泊客の先細りによって、多くの温泉地は財政的に逼迫しています。

もし仮に、発電所建設を認めれば、国から与えられる「電源立地交付金」によって町や村は潤います。

これが、地熱発電容認に傾く大きなインセンティブです。厳しい地元の実情を無視して、頑なに地熱発電反対を貫けば、温泉経営者のエゴと非難されても仕方ありません。

それでも、佐藤氏らが反対するのは、「カネと引き換えに、地域の数少ない資源である温泉をなくしていくのか」との思いが消えないからです。

私は、地域の資源を活用して事業化を目指す方々のお手伝いをする仕事をいくつか手掛けています。

「かつては人々が生活する上でなくてはならず、地域を支える一大産業であったものが、時代とともに廃れてしまった」ものをテーマにすることが少なくありません。

廃れるには、廃れる理由があります。機能に優れ、価格が安く、加工しやすい代替品がでてしまったら、後戻りはできません。廃れ尽くして無くなってしまったとしても、全国的に見れば誰も困らないのが現実です。

それでも、その地域資源に携わることから話を聞くと、何とかしなければならない気持ちになります。廃れる理由がある一方で、残さなければならない理由もあるのです。

佐藤氏は、会員宿から後継者を1人ずつ自分の宿に預り、2～3年かけて一人前の温泉経営者に育てる取り組みを行っています。宿泊予約の取り方、顧客の管理、調理場に立たせて料理を教え込みます。

さらには、佐藤氏の宿の金庫のカギまで渡し、宿の資金繰りを自分の手で覚えさせることまでします。

「山の宿は一軒だけでは存続できない。みんなが生き残ってこそ、次代に遺せる」と佐藤氏は、確信しているからです。

ここにヒントがあります。

衰退する地域資源の中で、一地域にしかないものというのはまれです。大半は、他の地域にもあり、同様の課題を抱えている事業者が存在します。それぞれが、地元地域で頑張っていることは知っているものの、お互いがつながらずにはありません。

思いは同じであれど、きっかけがないためにつながらないのです。逆に一度つながってしまえば、お互いの知恵を出しあって何か解決方法が見つかるのではないかという気がして仕方ありません。

山奥の温泉宿では、佐藤氏を通じてそれができているのです。

文化とは何でしょうか。

様々な答がある中で、先人達がコツコツと積み重ねてきた地味で人目につかない努力の成果物というもの、その一つの答えなのではないでしょうか。

見て見ぬふりはできません。